

日本学術会議健康・生活科学委員会主催 公開シンポジウム

『健康・生活価値』の探求—
健康・生活科学委員会からの
学術・教育への緊急提言
—生活科学分野から—

健康・生活科学委員会生活科学分科会

委員長 片山倫子

(第二部会員・東京家政大学家政学部教授)

平成23年1月7日 於日本学術会議講堂

本シンポジウムでは、

戦後の『**経済価値**』重視の視点から、

『**健康・生活価値**』への転換

および共存について

特に**学術の発展の方向性**と

次世代教育への提言を

健康・生活科学の分野から行うものである。

生活科学分野からの提言

- 生活科学(家政学)分野が果たして来た役割
- 生活科学(家政学)分野の果たすべき役割
- 生活科学(家政学)分野における次世代教育
(後継者育成および各種資格士養成)に対する
問題点
- 学校教育および大学教育のあり方に対する
生活科学分野からの提言

生活科学(家政学)分野が果たして来た役割

我が国における生活科学(家政学)に関する教育・研究は、日本家政学会を中核として発展してきた。

1949年 日本家政学会は人間生活の充実と向上に寄与する目的で、設立された学術団体である。

1982年 文部省から社団法人として認可された。

1985年 日本学術会議の登録学術団体となり、第13～19期第六部家政学研究連絡委員会(家研連)委員長には日本家政学会会員が選出され、日本学術会議会員として活動を行った。

2005年 第20期日本学術会議が大きな機構改革を行った結果、家研連は廃止され、第二部生命科学の分野別委員会の一つである健康・生活科学委員会に属する生活科学分科会として活動することになった。第20期の生活科学(家政学)分野からは会員が選出されなかったために連携会員も少ない状況が続いている。

2008年 第21期日本学術会議には家政学分野からも会員が選出され健康・生活科学委員会の活動にも積極的に参画している。因みに日本家政学会は60周年を迎えた。人々を取り巻く状況の変化が著しい中で「人間生活の充実と向上に寄与する」生活科学(家政学)分野の教育・研究活動が求められている。

キーワードから見た家政学の専門分野

養成している資格士等

家庭経営—生活経営・管理、家庭経済、生活設計

家族—家族関係、家族と地域・社会、高齢者、家族と国際化

児童—児童発達、育児・保育、家庭教育、児童文化、児童福祉、児童臨床

食物—食生活、栄養、食品、調理・加工、食品衛生、食文化・食生活史、食育

被服—衣生活、材料、整理・染色、構成、衛生・生理、心理、色彩・意匠、服飾史

学芸員、司書、司書補、繊維製品品質管理士、ラーコーデネーター検定試験

パターンメイキング技術検定、ファッションビジネス能力検定、洋裁技術検定、和裁技術検定

住居—住生活、住居史、住環境計画、デザイン、設備、構造・材料・防災、管理、住宅問題・政策

(一級・二級)建築士、インテリアコーデネーター

家政教育—家庭科教育、家政教育、地域教育

消費者問題

消費生活アドバイザー

ジェンダー

環境 毒物劇物取扱い責任者、公害防止管理者、危険物取扱者、
特定化学物質および四アルキル鉛等作業主任者

健康

生活福祉

関連する学問分野

経済学、社会学、医学、文学、史学、農学、食品工学、繊維工学、公衆衛生学、生理学、心理学、
デザイン学、建築学、防災工学、環境学、法学、教育学、福祉学

生活科学(家政学)分野の特徴

家政学は、「家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学」(日本家政学会、1984)である。

- 人の暮らしに関わるすべての事象が研究対象となるために関連する学問領域が広範である。
- 生まれてから一生を終えるまでの日々変化し続ける人間生活の充実と向上に寄与する。
- 一日(24時間)の時間の使い方はいずれのライフステージか?どのような生き方をしたいのか?等によっていろいろに変化する。
- 一人の人の持ち時間の中で何に生活時間を使うのかを選択しながら生活している。
- 生活科学分野で得られた知見はいくつかの選択肢を提供することになる。
- 「生活者の視点から総合的に考えること」が必須である。

第20期・第21期 生活科学分科会の活動

2008年7月5日(土)13:00~17:00 公開シンポジウムを開催した。

テーマ「子どもたちに生活科学を一家庭科の魅力と可能性一」

2008年7月 提言「食生活の教育」を提出した。

2010年3月4日(木)13:00~16:50 第1回公開講演会を開催した。

テーマ「大学の教養教育に授業科目「生活する力を育てる」を！」

2010年9月18日(土)13:00~17:00 第2回公開講演会を開催した。

テーマ「大学の教養教育に授業科目「生活する力を育てる」を！」

2011年3月12日(土)13:00~16:30 第3回公開講演会を開催予定。

テーマ「大学の教養教育に授業科目「生活する力を育てる」を！」

生活科学系コンソーシアムを設立した。

2006年3月 設立趣意書を作成し生活科学関連学協会に参加を呼びかけた。

2006年7月18日 発足式を行った。10学会が参加。会の趣旨、活動方針、規則案他を協議した。

2010年3月29日(月)13:00~17:00 生活科学系課程博士論文発表会(演題は5題)を開催した。

2011年3月24日(木) 13:00~17:00 生活科学系課程博士論文発表会開催予定。

生活科学(家政学)分野における次世代教育 (後継者育成および各種資格士養成)に対する問題点

- 後継者育成

関連学問領域のありようとの関わり(例えば、衣生活領域と繊維学部)

高校教育の充実-広く、深く、学ばせる。(理系文系を分けすぎている)

- 資格士養成(特に人に関わる資格は総合力が必要である)

管理栄養士資格

幼・小・中・高教員養成

保育士

学部教育で「ひと」に対する知識を十分に持ってから資格士の養成をする。
修士課程以上とする。

家庭科教員に求められている物は何か？

現行の養成方法でよいのか？

「繊維系科学技術に関する高等教育の現状と再構築に向けての繊維学会の取り組み」繊維と工業53巻6号(1997)著者;繊維学会白井前副会長(信州大学繊維学部長)

我が国の国立大学には昭和35年頃までに3つの繊維学部と19の繊維系学科があった。その頃までは繊維全盛時代で何れも活発な教育研究が行われていた。しかし、日米繊維交渉による対米ゆしゆつきせいや石油ショックを機に紡績産業を中心に打撃を受け、徹底した合理化、バイオ、エレクトロニクス等ハイテク産業への転換など繊維業界の大きな変革の中で繊維系学科も高分子、有機材料、材料物質工学等に名称変更され、基礎工学とハイテク工業へと推移していった。

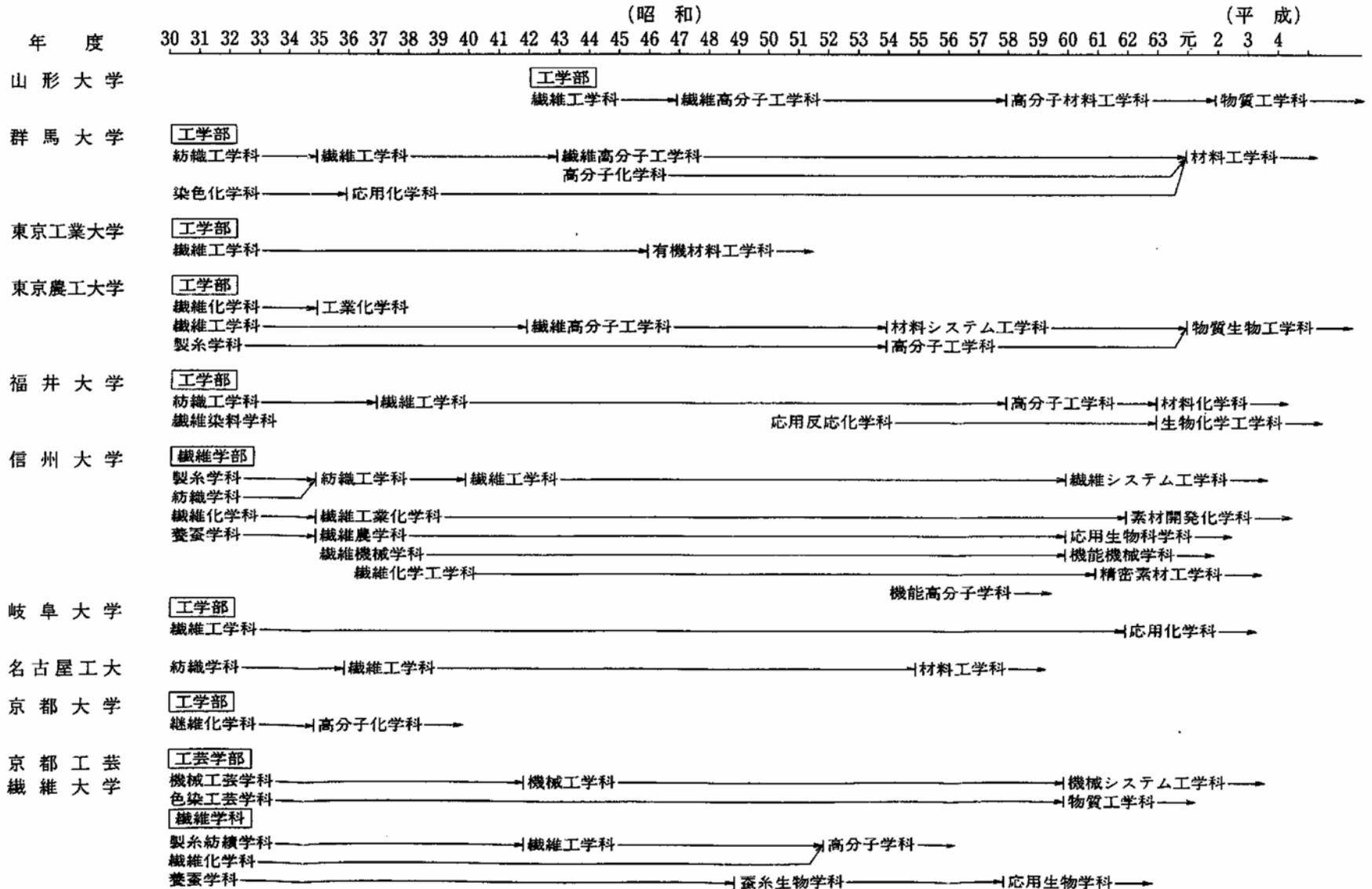
昭和40年頃までは、紡績工学、繊維工学、繊維化学など現在も欧米等全世界で行われている原料系から製品までの各工程での技術と工学を中心とした伝統的繊維工学の講義と実験、実習を中心にカリキュラムが組まれていた。各大学には、実習向上があり座学と実践を一貫して繊維科学技術が学べるようになっていた。実習向上では、最新とはいえないが、製紙、紡績、染色、加工など各工程の実機があり、豊富な技官により、少人数の懇切な実技教育が行われていた。

しかし昭和41年頃から。繊維業界の不振から求人が極端に減少し、それに伴い入学者が減少してきた。各大学は生き残りのために工学基礎とハイテク分野の工学教育へと転換し、名称変更が次々と起こっていった。(中略)

平成2年我が国の繊維科学技術教育が国立大学の中に2つの繊維学部があるものの、繊維を冠し繊維本流の科学技術教育研究を行う学科は信州大学の繊維システム工学1学科になっている。

衣生活関連領域である繊維学部・繊維学科の变革

図 II-1-4 全国工学系繊維関連学科の推移



学校教育および大学教育のあり方に対する 生活科学分野からの提言

教員の資格審査に関する問題点

- 生活科学(家政学)分野の教員に求められている教育研究を行う大学人としての資格の有無をどう判定するか？
- 論文の数だけでは無く、内容特に人の視点に立った物の考え方、総合力に関する判定基準が重要である。
- 大綱化以降大学院等の改革は届け出でだけでもよいことになっている。資格審査の有り様を早急に見直す必要がある。

学科の改変について

- 大学の経営を重視すると、卒業時に就職がありそうな学科(入試の際に受験生が魅力を感じる学科)に簡単に改組が出来る。人の暮らしにとって必要な学問領域であっても急激に衰退していく。
- それぞれの学問領域をどのように存続させていくのか？
- 関連学協会の協力を得て学術会議として対策を考える必要があるであろう。

健康・生活科学委員会生活科学分科会として 何が出来るか？

題目 大学の教養教育に 授業科目「生活する力を育てる」を！

【趣旨】

豊かな質の高い社会を構築するためには、より多くの人々が健康で質の高い生活を送ることが基礎となる。成熟した現在の日本社会では、価値観が多様化しており、画一的な「規範となる生き方」はなく、個人個人が総合的な視野で自分自身がどのような人生を送るかを選択する必要がある。人生を大きく3段階に分けて考えた時、「育てられる時期」、「自立し社会活動をし、次世代を育てる時期（成人期）」、「社会的活動を終え、生きる時期（老齢期）」に分けることが出来る。10代の後半の時期（大学入学時）は、成人期の入り口にあり、これからの人生を見通して自分自身の生き方について考えるべき時期である。健康で健全な豊かな生活（QOLの高い生活）を作り上げていくための生活に関わる諸事を多面的に理解し、自身の生活の場で選択・実践していくことが必要である。また、大学で専門教育を受け、それぞれの分野で専門家として社会活動を行う場合にも、最も基礎となる人間の生活を考えることのできる総合的視点が必要である。

大学への進学率は、既に50%近くなっており、大学での教養教育で学習することは多くの人々に学ぶ機会を提供することになる。

大学進学以前の生活に関する教育は、家庭科として行われており、小学校高学年から始まり、中学校、高等学校まで行われている。小学校では、育てられる立場からの理解、中学校では自我の目覚める時期としての理解、高校では自主的に生活を営む立場で教育が行われている。その教育の実態は、広範囲の内容であるにもかかわらず授業数が少ないことなどで十分な効果を上げていない。もう一度、大学教育の初期段階で教育の機会を設けることの効果は大きいと考えられる。

上記の理由により、人間生活に関する最新の知識と情報を提供して生活を理解し、自身の価値観に基づいて自らの生活の選択について考える機会を提供するために、大学の教養教育の中に上記科目を取り入れることを提案したい。

授業内容としては、**体と心の変化**（生まれてから老年に至る体の変化、心と体の関係、生活の管理と健康など）、**人と人との関係**（家族関係、社会人としての人との関係など）、**社会の仕組みと生活**（経済活動、社会保障、家庭経済など）、**自然環境と人の暮らし**（自然環境と子どもの育ち、生活の高度化と自然環境など）、**生活上の具体的問題**（衣、食、住）など、を上げることが考えられる。より充実した質の高い授業内容の構成を考えるために、それぞれの分野の専門家の見解を聞き、最新の情報を得るために数回の講演会を開催する。

対象

生活科学関連の教育・研究者、大学の教務および教養教育の担当者、生活科学を専攻する大学生・大学院生、さらに一般の社会人に広く公開する。

【経緯】

授業科目構築のための内容のうち、第1回公開講演会では、**体と心の変化**（生まれてから老年に至る体の変化、心と体の関係、生活の管理と健康など）、**人と人との関係**（家族関係、社会人としての人との関係など）の内容を取り上げ、下記の通り講演会を開催し、100名弱の方にご参加頂いた。

第2回公開講演会では、**社会の仕組みと生活**（経済活動、社会保障、家庭経済など）、**自然環境と人の暮らし**（自然環境と子どもの育ち、生活の高度化と自然環境など）の内容を取り上げ、約60名の参加者があった。

第3回公開講演会では、より具体的な生活上の問題について取り上げる。

*** 第3回公開講演会は開催予定の3月12日前日に起きた東日本大震災の影響で開催が7月5日(火)に延期された。**

第1回 公開講演会プログラムの概要

開催日時 平成22年3月4日(木) 13:00～16:50

開催場所 日本学術会議講堂

演題と講演者

1. 生活機能の性・年齢別変化：身体教養のススメ
福永哲夫氏 (日本学術会議第二部会員・鹿屋体育大学学長)
2. 生活の管理と健康 -成長期からの骨の健康づくりと生活習慣の重要性-
塚原典子氏 (日本学術会議連携会員・新潟医療福祉大学准教授)
3. 少子化の中の子どもの育ちと親としての経験
無籐隆氏 (日本学術会議連携会員・白梅学園大学教授)
4. 長寿時代—新しい生活のマネジメント
工藤由貴子氏 (文部科学省)

第2回 公開講演会プログラム概要

開催日時 平成22年9月18日 13:00～17:00

開催場所 日本学術会議講堂

演題と講演者

1. 資本主義の中で生きるということ
岩井克人 (日本学術会議第一部会員 国際基督教大学客員教授)
2. 現代生活の枠組みと生活経営—生活者の視点から
堀越栄子 (日本女子大学教授)
3. 自然環境と人間の生活—グローバルな視点から
池田駿介 (日本学術会議第三部会員 建設技術研究所室長)
4. わたしたちの暮らしはすべて世界につながっている～商品の一生を知ろう～
辰巳菊子 (日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会常任理事)

プログラム

日時 平成23年3月12日(土) 13:00~16:50

○開会の挨拶

13:00~13:10 春日文子(日本学術会議第二部会員、国立医薬品食品衛生研究所室長)

○講演1 「くらしの視点から法を見直すー生活法学の試み」

13:10~14:00 戒能民江(日本学術会議第一部会員、お茶の水女子大学教授)

○講演2 「衣服とくらし」

14:00~14:50 片山倫子(日本学術会議第二部会員、東京家政大学教授)

○講演3 「くらしの中での食の位置づけ」

15:00~15:50 渋川祥子(日本学術会議連携会員、横浜国立大学名誉教授)

○講演4 「生活歴と住居の関係」

15:50~16:40 小川信子(日本女子大学名誉教授)

○閉会の挨拶

16:40~16:50 江澤郁子(日本学術会議連携会員、日本女子大学名誉教授)

場所 日本学術会議講堂

(〒106-8555 東京都港区六本木7-22-34 電話 03-3403-3793 代表)